

[紹介]

## 韓国のダンススポーツ：大学での講義及び参加の現況

権 仁善<sup>1)</sup>, 信田 よしの<sup>2)</sup>, 朴 南美<sup>3)</sup>

### Dance sports in Korea : The present condition of class and participation in Korean universities

Inseon KWON<sup>1)</sup>, Yoshino NOBUTA<sup>2)</sup>, and Nammi PARK<sup>3)</sup>

#### 1. はじめに

ダンススポーツ (Dance sports) は、17世紀ヨーロッパの宮廷舞踏会で、社会的な交流を目的に男女がお互いに円形になってパートナーを変えて踊る社交ダンス (Social Dance) から始まった。

ダンススポーツは、男女がペアを組むことで、相手に対する思いやりやエチケットやマナーを身につけることができる。礼節と運動の両面を持ち合わせていることに加え、基礎運動と芸術的価値を追い求める種目だと言える。

ダンススポーツはスタンダードダンス (Standard Dance) とラテンアメリカンダンス (Latin American Dance) に分類される。スタンダードダンスにはワルツ (Waltz), タンゴ (Tango), ビエニスワルツ (Viennese Waltz), スローフォックストロット (Slow Foxtrot), クイックステップ (Quickstep) の5種目、ラテンアメリカンダンスにはサンバ (Samba), チャチャチャ (Cha Cha Cha), ルンバ (Rumba), パソドブレ (Paso Doble), ジャイブ (Jive) の5種目からなっている<sup>27) 28)</sup>。

ダンススポーツの長所は老若男女を問わず、誰もが楽しく運動することができるため、全身を動かす事で身体のバランス感覚の発達や肯定的な情緒変化、望ましい人格形成に効果があり、ダンススポーツを通じて様々な経験できることは生活の質 (Quality of Life) を高めることができる。

ダンススポーツは新しいダンスではなく、ボールルームダンス (Ballroom Dance) や社交ダンス (Social

Dance) と呼ばれ、各種国際大会で競技ダンスとして行われてきたダンスが発展したものである。その後、国際アマチュアダンス協議会 (ICAD) が1990年に国際ダンススポーツ連盟 (IDSF) に変更され、1995年4月にモンテカルロであった国際オリンピック連盟 (IOC) の執行委員会においてダンススポーツの芸術的、科学的、スポーツ的そして競技的要素が認められ、IOC加盟団体に承認された。また、1997年9月にはIOCに正式に承認され、ダンススポーツという新しい用語が誕生するようになった。1998年のバンコクアジア大会でダンススポーツは示範種目として採択され、2000年、シドニーオリンピック閉幕式では、500余組のダンススポーツ選手が演技し、ダンススポーツは全世界に広まっていった。

ダンススポーツは、本質的には競技を目的にした競技であるボールルームダンスでオリンピック正式種目になることを最終目標にしている。そのなかでも韓国でのダンススポーツは競技用ダンス以上の意味を持っている。韓国では、社交ダンスはそのイメージから暗いスポーツという認識が持たれ、否定的に認識されていた。しかし、近年ダンススポーツという用語が入ってきてから、ダンススポーツはボールルームダンスや社交ダンスではない「スポーツ」の一つとして認識され、大衆的なレクリエーション活動として人気になっている。

ダンススポーツは5大陸、68ヶ国の正会員と11ヶ国の準会員を含めた79ヶ国で行われ、国際ダンススポーツ連盟 (IDSF) が統括している<sup>1)</sup>。

韓国でダンススポーツ関連の最初の公式組織が創立

1), 2) 九州共立大学スポーツ学部  
3) 国立公州大学舞踊学科

1), 2) Kyushu Kyoritsu University Faculty of Sports  
Science  
3) Kongju National University Department of dance

されたのは1970年で当時文教部から社団法人である登録を取得した韓国舞踏協会<sup>2)</sup>で、文化観光省は1995年にダンススポーツを21世紀ニューススポーツとしてレクリエーションの一種目として選定した。

また、ダンススポーツが大学の教科として開設されたのは、1999年に同徳女大学で開設されたのをきっかけに、2000年には水原大学にダンススポーツ学科が新設され、ダンススポーツ界が活性化した<sup>2)</sup>。このように始まったダンススポーツは、現在、韓国の多くの大学で基礎教養科目や専攻科目として開設され、大学が運営する生涯学習センターや、地域社会のカルチャーセンター、区民体育会館、放送媒体のカルチャーセンターでも開設され、人気講座として位置づけされている。また、ダンススポーツリーダーたちが運営する私設学院も徐々に増え、多くの人々がダンススポーツを容易に体験することができるようになった。

現在、ダンススポーツ人口の正確な統計は明らかにされていないが、2000年に30万人程度と推算され<sup>2)</sup>、2001年にはインターネット上でのダンススポーツ同好会サイトも1000以上を数え、その会員は300万人<sup>24)</sup>にのぼり、2004年にはその人数を400余万人に修正した<sup>25)</sup>。さらに2006年には600万人<sup>26)</sup>と推算されている。このようにダンススポーツ人口は継続的に増加を続けており、ダンススポーツ愛好者も性別、年齢層を問わず増加しており、愛好者の増加現象は継続されると思われる。

このようなダンススポーツ人口の爆発的な増加を受け、体育学分野ではダンススポーツが運動として望ましい価値を持つ種目であると位置づける研究も盛んに行われるようになった。

現在、国内学会誌の原文情報を提供する韓国学術情報 (KISS ; Korean Information Service System) のデータベースの中でダンススポーツと関係する主題を含んでいる論文は277編にのぼる。

研究主題は体育学の各分野別で生理的、心理的、社会的そして教育的関係など多様な主題でダンススポーツに対する量的、質的研究が行われている<sup>3) 4) 5) 6) 7) 8)</sup>。

研究された結果によれば、ダンススポーツに参加した対象者は、非参加対象者より多様な項目の従属変数から、より良い結果を得ることができた。ダンススポーツ参加者は非参加者に比べて自己尊重感が高く、潜在的逸脱性向は低い<sup>9)</sup>。また、ダンススポーツに参加することはストレスの減少や、否定的心理状態を解消し、心理的安定感を高く保つことができるため、メンタルヘルスに肯定的な効果を与えるため、生活満足度と余

暇満足度も高い<sup>10) 11) 12)</sup>。

ダンススポーツ同好会に所属している参加者と、個人的にダンススポーツ参加者では、継続的にダンススポーツを行う期間に差があり、同好会に所属している参加者達が個人的参加者より余暇満足度が高く<sup>13)</sup>。また、精神分裂症患者にダンススポーツを実施した場合は、体脂肪率が減少して柔軟性、敏捷性、背筋力や肺活量が増加したという研究<sup>14)</sup>もある。

ダンススポーツは身体的、社会的、情緒的、教育的効果を備えており、ダンスとスポーツの両面の特性を共有している上、芸術性も豊かなため、スポーツとしてだけではなく生活体育の一分野にも定義されている。

本稿は韓国の大学でダンススポーツがどのようになりたち、学生たちがダンススポーツを通じてどのような経験できるかの実例を紹介し、今後、日本の大学においてダンススポーツ活性化のきっかけとなるための基礎資料を提供する。

## 2. 韓国の大学のダンススポーツ講座の現況

本調査は、2007年文化観光省に登録されている韓国の4年制大学を対象に行った。各大学のホームページを通じて教養教科過程と専攻教科過程を検索し、ホームページにカリキュラムを公開していない大学については、教科課程担当者にE-mailまたは電話を通じて情報を収集した。これに加えて、調査者のダンススポーツ関連研究ノートを参考にした。

韓国大学教育協議会<sup>29)</sup>が2007年度高等教育機関の現況に関して調査した統計資料によると全国4年制大学は表1のようである。

表1. 韓国の4年制大学の現況

区分	大学(校)	体育系列(校)	ダンススポーツ開設(校)
国・公立	39	33	24
私立	159	100	110
合計	197	133	134

韓国大学協議会の統計調査(表1)によると全国4年制大学は197校あり、その内国・公立大学は39校、私立大学は159校であった。この中で国・公立大学は6大学を除いた33大学、私立大学は100校の大学に体育系学科が開設されている。また、各大学のダンススポーツ教科科目開設の現況を見れば、全体197校の大学の中で回答内容が不明や正確な資料がわからない63

大学を除いた134校の大学で国・公立24校の大学，私立大学は110校の大学で教科課程にダンススポーツが開設されている。

表1と関連して各大学で教養科目及び専攻科目で成り立っているダンススポーツ講座の現況について調査した(表2)。

表2. ダンススポーツ講座の現況

区分	講座数(校)					合計
	1講座	2講座	3講座	4講座	4講座以上	
教養	85	10	3	4	3	105
専攻	53	36	4	6	3	101

ダンススポーツと言う教科名以外に，スポーツダンス，ボールルームダンスなどで表記している教科目も含んだ講座の現況は，教養過程でダンススポーツが開設されている学校は105校の大学で講座数を見れば1講座開設されている大学が85校で一番多く，2講座が10校，4講座が4校，3講座と4講座以上が3校であった。4講座以上を開設している大学の中で一番多い講座数を開設している大学は原鉦大学の9講座だった。

専攻過程でダンススポーツが開設されている大学は101校で，講座数を見れば1講座開設されている大学が53校で一番多く2講座が36校，4講座が6校，3講座が4校，4講座以上が3校であり，この3校は正確に述べると6講座を開設している。

このように多くの大学でダンススポーツ講座が実施され，各大学で人気のある教養科目である。また，ダンススポーツは受講人員が1講座の定員が30-40人位に制限されているため，短い期間で受講申請が締め切られる科目の一つである。

学生たちは教養科目または専攻科目授業以外にも校内サークル活動，インターネット同好会，または個人的に私設学院に登録するなど，授業と連結して持続的にダンススポーツ活動をおこない，大学総長盃ダンススポーツ大会を含む各種団体が主催するダンススポーツ大会に参加し，自分の技術を発揮している。

### 3. ダンススポーツ授業内容について

ダンススポーツの一般的な授業目標は，ダンススポーツの授業を通じてエリート選手を発掘するのではなく，生涯スポーツとして健全なダンススポーツの普及と実

用知識を提供することで，幅広い大学生活を営むために必要な身体的，精神的健康及び有用な余暇活動のための意識と態度を自然に養うことのできることである。

そのため，ダンススポーツ講座では上述したような授業目標を果たすために何を教えているかをまとめた教養ダンススポーツのシラバスの例示は表3のとおりである。

表3-1. 教養ダンススポーツシラバスの例

科目名	ダンススポーツ
授業目標	生涯スポーツとして健全なダンススポーツを通じて日幅広い大学生活を営むために必要な身体的精神的健康及び有用な余暇活動のための意識と態度を自然に行なうことできる。
授業方法	実技及び講義
評価	出席 30%、発表 50%、レポート 20%
第1回	ダンススポーツとは何か(歴史、礼節、用語等について) ビデオ感想 (ダンススポーツプロ、アマチュア大会)
第2回	ダンススポーツ基本姿勢及びステップ、音楽の理解
第3回	チャチャチャ 初級 1-2
第4回	チャチャチャ 初級 3-4
第5回	チャチャチャ初級 5-6
第6回	チャチャチャ初級 7-8
第7回	ジャイブ 初級 1-2
第8回	ジャイブ 初級 3-4
第9回	ジャイブ 初級 5-6
第10回	ジャイブ 初級 7-8
第11回	チャチャチャ、ジャイブ Routine
第12回	チャチャチャ、ジャイブ Routine
第13回	チャチャチャ、ジャイブ Routine (応用)
第14回	発表 (ペア) - Test
第15回	発表 (グループ) - Test
課題	ダンススポーツの価値と展望に対して
注意事項	*欠席日数 1/3以上単位部で不可。 *遅刻3回は欠席1回。 *レポート提出である以後提出は 1日減点

表3に提示されてある学期の授業は15回から成り立っており，大学ごとに違いはあるが授業時間は1コマ100分から150分で成り立っている。世界各国ではその国ごとの民俗舞踊があるが，ダンススポーツは全世界的に共通された用語と図法で楽しむように作られたダンスである。その特徴から，ダンススポーツを経験した人なら世界中でも初めて会う人であっても一緒にダンスをすることができる。

教養過程と専攻過程の授業内容は担当リーダーによって違いはあるが，国際ダンススポーツ連盟の作法を基にした基礎過程と応用過程から成り立っている。次表3-2はダンススポーツシラバスのチャチャチャとジャイブフィギュア (Figure) を示している。

表3-2. 教養ダンススポーツシラバスの例

Cha Cha Cha	Jive
Open Hip Twist	Basic Movement
The Fan	Right Turn
Hockey Stick	Fallaway Throwaway
Closed Basic Movement	Link Rock
Natural Top	Change of Place (R to L)
Natural Top	Change of Place (L to R)
Natural Opening out Movement	Change of Hand Behind Back
Reverse Top	American Spin
Opening out From Reverse Top	Link Rock

表3-2に示した内容はダンススポーツの基礎フィギュア (Figure) である。ダンススポーツリーダーたちは国際ダンススポーツ連盟のフィギュアを基にして各大学の教育目的と学生たちの水準を考慮して15回の授業の間、学生たちがダンススポーツに興味を持ち理解して学ぶことができる授業をつくるために努めている。

#### 4. ダンススポーツ講座に参加した学生たちは何を体験するか？

大学生の年齢層は、最も活発で自発的に多くの活動に参加することができる年齢層であり、社会人としての出発を準備する最後の段階<sup>15)</sup>でもある。大学で経験するスポーツやレクリエーション活動が、社会進出後の就業、あるいは生活スポーツ、生涯スポーツを持続するための重要な時期とすることができる。

ダンススポーツの授業に参加する学生たちは、家族のダンススポーツ活動観察、以前のダンススポーツ活動経験、友達の推薦や勧誘などの多様な参加動機を持っており、以前にダンススポーツを経験した学生であればあるほどダンススポーツの授業参加動機に内的価値に期待をもって参加する<sup>16)</sup>。

大学生のダンススポーツ活性化のための基礎研究<sup>17)</sup>によれば、大学生のダンススポーツの授業への参加動機として、「自ら望んで受講する」が男女ともに最も高い割合を表し、ついで他人からの勧誘だった。このような結果は1999年体育科学研究員で一般人を対象にした研究結果でも同様であった。

またダンススポーツに参加する理由として、男子学生は余暇時間の活用 (31.5%)、体力及び健康増進 (16.8%)、社交活動 (16.4%)、ダンススポーツに対する好奇心 (16.0%)、ダンススポーツをしたくて (10.5%)、異性との出会いのために (7.6%)、その他 (1.3%) の順であった。また、女子学生の場合は余暇時間

の活用 (31.5%)、体力及び健康増進 (16.8%)、ダンススポーツをしたくて (10.5%)、社交活動 (16.4%)、ダンススポーツに対する好奇心 (16.0%)、その他 (1.3%) という結果となり、異性間の出会いのためにと返事した学生は一人もいなかった。生活体育としての適合性の可否に関する質問においては男女共に94%以上が相応しいと返答し、その理由としては余暇時間の活用と円満な社交活動及びヒューマンリレーションズの形成、体力及び健康増進と言う結果であった。これは既存の研究<sup>18)</sup> <sup>19)</sup>で現われた結果と等しい結果であり、大多数の人々がダンススポーツを生活体育で望ましいと認識していることを現わしている。このような結果は、ダンススポーツが否定的な認識から脱して生活体育としても基盤を構築したことに関連する。

本章ではダンススポーツに参加期間にどのような経験をするか、既存の研究結果及び指導中の観察結果を事例を通じて考察する。

##### 1) 内的動機づけ

ダンススポーツの授業は大学生たちにとって一般的な授業とは違い、以前の生活の中では乏しい経験であり挑戦的活動である。すなわち、日常生活や他の授業で近付くことができない珍しい経験を通じてダンススポーツ授業を体験するようになる。初めは多くの授業中の一科目という意識で授業を通じて単位を得るために外的補償という期待を持って受講申請し、授業に参加するが授業が開始されダンススポーツを学ぶようになると「私もできる」という自信を得ようになり、自発的で積極的に授業に参加し、自ら課題を持って望むようになる。ダンススポーツを通じて得る楽しみは「内的」であり、個人的な満足と技術向上を通じて活動そのものに自己効力感をえる。その結果、当初は、授業の参加目的が「外的補償」から、「内的補償」に変容していく。

##### 2) 動きを通じるコミュニケーション

ダンススポーツは一人で踊るソロダンス (Solo Dance) と男女と一緒に踊るカップルダンス (couple Dance) がある。カップルダンスでは、ダンスを一人のパートナーではなく、パートナーチェンジという機会を通じて様々な人々と出会いを持つようになるという特性がある。

スポーツ活動が与える身体的要素に加え、男女と一緒に音楽にあわせて一体となることができる機会を提供するダンススポーツ授業は、男子学生にとつ



ては異性との自然な出会いの機会、女子学生にはダンススポーツの授業を通じて人間関係の形成及び友達づくりなどの体験を提供することができる。

ガンヨジュ<sup>4)</sup>の研究によれば研究参加者は“ダンススポーツはパートナー共に演技し、一つの作品を作り上げることが魅力的であり、またパートナーの存在があることで、高いモチベーションを維持することができ、さらに熱心になる”と表現した。このことから、男女が相互理解と協同の精神を持ってパートナーシップを発揮しなければならない特性を持つ。同時に、ダンスをする過程で起きる自然な身体接触は、エチケットとマナーを守りながらダンスをする。このようにダンススポーツ教育を通じて男女がお互いに尊重し、パートナーに対する礼儀を持つことで、お互いに親睦を図ることができる。一歩進んで社交性、礼儀、協同性などを身をもって実践することで、秩序と規則などを学ぶようになる。

### 3) 身体像 (Body Image) の変化自覚

ダンススポーツを踊る時には日常生活で使わない方法で身体を動かすことになる。ダンススポーツの動作と技術は主に前進、後進、回転で構成され、特に後に歩く動作が多い。このような基本動作と姿勢は、身体均衡感覚と筋肉を発達させる特性を持つ。

アメリカの心臓学会運動委員会ではダンスを心肺機能に良い影響を与える運動療法としてサイクリングなどとともに奨励している。ダンススポーツの酸素消費量を運動量に換算すると30分のワルツはシングルテニスやバレーボールの20-30分の運動量と同等であり、ゴルフとに換算すると12ホールから18ホールを回る運動量にあたる<sup>20)</sup>。

またダンススポーツのステップは1分間に最低100歩、最大で300歩のステップを踏まなければならないため、90分間ダンスを行なう場合、600kcalのエネルギーを消費することになる<sup>21)</sup>。

ハンヒェワン、イヤングツル(2006)の研究によれば、ダンススポーツに参加する大学生が参加しない大学生に比べて自分の身体に対して肯定的な身体像を持っており、参加学生が不参加学生に比べ、相対的に満足していると報告した。

トップダンサーのダンスを見ると、すべての動作が自然で楽に見える。これは身体の姿勢、スタイリングそして柔軟性などが調和を成すことで可能になることである。

まず両足を肩幅位に広げ、膝は少し曲げたまま両手

を身体の横にきちんと置き背筋を伸ばして立つ。バランスを取りながら、ヒップ (Hips)、肩 (Shoulder)、そして頭 (Head) が足の上できちんと一直線になるようにしてお腹に力を込めて腰を伸ばす。このようなダンススポーツの基本姿勢は特有のものであり、基本姿勢を学んでからは、ダンスをする時間以外にも日常生活の中で以前とは違う姿勢を維持しながら座るもしくは歩く習慣を持つようになったと言う。

### 4) 行動と認識の没入 (flow) 経験

アメリカのダンス教師であるMurryはダンススポーツをリズムカルな身体的動きを通じて美的価値を情緒的に表現することを「音楽との対話」と定義した<sup>22)</sup>。

ダンススポーツを初めて経験するようになる学生たちは、慣れないステップと用語によって初めはダンスの手順や外面的な部分に気を使う。しかし、ダンスに慣れた後には、意識的にしなくても本人の身体が自ら自然に動いているということを感じると言った。

ダンス参加者は“日常生活にはない動作をすることで、モダンダンスをする時には女らしさ、ラテンをする時には楽しさと情熱を感じた。また、ある瞬間に自然と身体の緊張がとけて、スムーズに動作ができるようになり、連続して踊ることで、ダンスと音楽の特徴を身体で感じ、それを踊りで表現しているという感じがします。その瞬間は、まわりは何も見えなくなり、パートナーと二人だけで舞台上で踊っているという感じ”と表現した<sup>4)</sup>。

多様な音楽に合わせて身体を動かしながら踊る感覚や、感情を身体で表現することで創造的な自己表現の機会を持つようになること、踊ることに没頭することで、自己世界と外部世界の区別、自分の表現技術の向上、音楽と動作のシンクロ、パートナーとの調和などを複合的な現象で表現している。

これは、ダンススポーツの最適な経験の一つであり、また、最も普遍的、かつダンススポーツ独特の特徴の一つでもある。さらに、没頭することでその行動は自発的ではなく、自動的に起きると言われている。

### 5) 男子学生のダンスに対する態度変化

ダンススポーツは、男女が一緒に音楽に合わせて身体を動かすことを通じて芸術の美的価値を創造する新しい形態のスポーツである。

男子学生たちは女子学生たちに比べて受講申請に積極的ではない。男子学生はダンススポーツに対しては肯定的な認識を持っていながらも、本人が直接ダンス

スポーツに参加することを周りに知らせることができない羞恥心があり、社会的にも男性の舞踊活動に対して中立的または多少否定的な認識がある。

男子学生は男性のダンススポーツ参加に対する認識として、伝統的儒教思想に基盤をして異性間の排他的文化とともに舞踊活動は「女性的なこと」、「静的なこと」という役割 (sex-role) の固定観念<sup>23)</sup>に起因した側面がある。

しかし男子学生たちのダンスに対する消極的、否定的認識は、ダンススポーツの授業が進行されるによって男性がリードをするようになるダンスの特性と、人前でダンスをすることで消極的な姿勢は、徐々に積極的に挑戦的な態度を持つようにならなくなった。また、男性的スポーツで経験することができなかった新しい楽しさを感じるようになり、ダンススポーツに参加する男性に対する考えがどのくらい肯定的に変化するかを自ら感じるようになったと言う。

男子学生たちはダンススポーツ授業に参加することで舞踊活動に参加する男性に対する既存の否定的認識と態度を切り替える機会を持つようになった。女性の領域だと思ったリズム活動をダンススポーツを通じて新しい動きと身体活動を体験しながら楽しさを体験し、これを通じてストレスが解消されることで生活にゆとりを持つことができた<sup>16)</sup>。

ダンススポーツを通じて得ることができる統合的な経験は、他の多くの経験のために努力するようになる。このような過程の循環を通じて、個人的な目標の成就だけではなく、自我を成熟させていく。

また、一度でもダンススポーツ経験のある人はダンススポーツの身体的、精神的、社会的などの肯定的な価値に対する認知的要因を高く評価し、健全で楽しいレクリエーション文化の一分野として認識していることが分かる。

## 5. まとめ

本稿は韓国の大学で教科の一つに定着され行われているダンススポーツが、どのように実施されていて、学生がダンススポーツを通じてどのような経験できるかの事例を紹介し、今後、日本の大学においてダンススポーツ活性化のきっかけとなるための基礎資料を提供することを目的としている。

大学で開講されている講座は非常に多様であり、基礎学問を含めて社会的要求を反映し、時代のニーズに合わせた新しい知識と新しい教養を基にして編成され

ている。

現在、韓国において、ダンススポーツは、ニューススポーツの一つで人気があり、社会共同体の一員として持たなければならない基本的な協同精神と人格、相手に対する礼儀と気配りの心で男女が手を取り合ってリーダーシップと節制を土台にした紳士道を発揮し、女性の美しさと柔らかさを表現する芸術的側面と技術的側面をすべて等しく取り揃えた新しいスポーツとして脚光を浴びている。

ダンススポーツに対する社会的価値の変化にともない、1999年に大学教科に初めて採択された以後、現在、全国134の大学でダンススポーツを教養科目及び専攻科目として採択している。また、大学だけでなく小・中・高等学校でも体育教科と放課後活動を通じて行われており、大学の生涯学習センター、社会団体、言論機関、スポーツセンターなどを通じて急速に広まっている。

ダンススポーツに参加した学生たちは多様な経験を得ることができる。その中でも学生たちの大半が共通的に経験する内容として次のようなことが挙げられる。一つは、授業に参加しながら単位履修のための“これをしなければならない”という外的動機づけより、“これをしてほしい”という内的動機に価値をおいていることである。次に、男女が相互理解と協同の精神でパートナーシップを発揮してエチケットとマナーを実際に実践することにより、秩序と規則などを学ぶようになることである。三つめは、ダンススポーツの動作と技術を修得することで、それまでの日常生活で行わなかった動作を身につけることで、ダンスをするための正しい姿勢を日常生活にも意識して身体を使うようになることである。四つめに、ダンスは女性的なこと、静的なことと認識していた男子学生たちも、ダンスとスポーツ的要素を取り揃えたダンススポーツを経験することでダンスに参加する男性に対する認識と態度を切り替える機会になったと解答している。最後に、ダンスにのめり込む行動と認識の調和、自身の内面世界の表現、音楽への没頭、パートナーとの調和などが複合的に現われている。

大学で教育されるダンススポーツは、ダンススポーツに対する身体的、社会的、情緒的価値に対する認識と、健全な余暇活動としての望ましい位置の確立はもちろんのこと、国際的に認められるスポーツ種目としてダンススポーツ競争力強化に肯定的影響を与えることができるとして期待されている。

このようにダンススポーツが理論的、実践的側面に

においても急速に発展しているが、ダンススポーツの持続的な発展と大学教科としてダンススポーツの学問的確立のためにはダンススポーツの機能的側面と専門的な知識を兼備したクラスメディア養成が必要であり、学問的分野においても断片的研究ではなく、理論的背景に基づいた体系的で持続的な研究が必要である。

以上の条件が充足される時、ダンススポーツは大学の教科として教育的価値が確立され、一歩進んだダンススポーツが生活化、普遍化、大衆化されることができる基盤を取り揃えるようになるであろう。

### 参考文献

- 1) ギムヒョンナ (2004)：ダンススポーツ：競技化対スポーツ化. 韓国体育学会誌, 43(2)：201-211.
- 2) ジェニュジン, ギムザングファン, ユジェオン (2003)：マスコミを通じるダンススポーツの大衆化過程. 韓国体育学会誌, 42(4)：249-286.
- 3) ギムミリャン (2007)：真摯な余暇 (Serious Leisure) として持続的なダンススポーツ参加活動. 韓国スポーツリサーチ, 18(1)：381-392.
- 4) カンヨジュ (2006)：大学生のダンススポーツ授業参加を通過のflow経験の理解について. 韓国体育学会誌, 45(1)：131-139.
- 5) ハンヒェワン, イヤンツル (2006)：大学生のダンススポーツ参加と身体像及び精神健康との関係研究. 韓国女性体育学会誌, 20(1)：109-120.
- 6) ギムヨンミ, ハンヒェワン (2005)：ダンススポーツの楽しさ要因と余暇没入及び余暇満足の関係. 韓国体育学会誌, 44(6)：193-202.
- 7) 権仁善 (2006)：生活舞踊プログラムが女性独居老人の精神健康及び自我尊重感に及ぼす効果. 忠南大学 大学院 博士学位論文.
- 8) ギムヘキュン (2000)：大学教育舞踊経験及び舞踊参加の関係. 国民大学 大学院 博士学位論文.
- 9) バックギェスン, ツェフィナム, イドウン (1999)：スポーツダンスが青少年の自分尊重感及び潜在的逸脱性向に及ぼす影響. 韓国体育学会誌, 38(2)：131-144.
- 10) ギムスン Chol, ハンミュンジャ (1999)：大学生のダンススポーツ参加が精神健康に及ぼす影響. 韓国体育学会誌, 38(4)：221-228.
- 11) ギムウンヘ (2003)：ダンススポーツ参加がストレス, 社会的価値及び精神健康に及ぼす影響. 韓国体育学会誌, 42(5)：121-133.
- 12) イムゼスック (2001)：女子大学生のダンススポーツ参加が余暇満足に及ぼす影響. 韓国体育学会誌, 0(3)：321-329.
- 13) ゾングデヤング, イチョヨン, ゾンテズン (2003)：ダンススポーツの同好会参加及び個別的参加者の余暇満足に関する分析. 韓国体育学会誌, 42(1)：337-346.
- 14) ホングミョングヨブ, イケン Chol, ジャンソンドン, チョジンカン, ギムズヒョック, イユンカン, キム・ヨンジュン (2003)：ダンススポーツ運動が精神分裂症患者の体力に及ぼす影響. 韓国体育学会誌, 42(2)：567-575.
- 15) イムボンザング, ギムホングソル (1996)：大学生の余暇活動類型及び余暇満足の関係. 韓国体育学会誌, 35(4)：480-491.
- 16) ゾミヒェ, ギムムヨン (2005)：男子大学生のダンススポーツ授業参加態度の現象学的分析. 韓国体育学会誌, 44(3)：341-355.
- 17) ハンヒェワン (2001)：大学生のダンススポーツ活性化のための基礎研究. 韓国女性体育学会誌, 15(1)：207-216.
- 18) ギムヒョンナ (1999)：ダンススポーツの理論的考察. 韓国余暇レクリエーション学会誌, 16：95-104.
- 19) ゾンソンヒェ, ギムヨンジュ, ギムヤングリエ (2000)：生涯体育としてダンススポーツ活性化方案に関する研究. 韓国女性体育学会誌, 14(1)：223-239.
- 20) ギムセジョン (1999)：踊りの大衆化のための研究. プサン大学 大学院 博士学位論文.
- 21) バックギェスン (1997)：ダンススポーツと健康. 第1回ダンススポーツ発展セミナー. 韓国ダンススポーツ連盟.
- 22) ゾギョチョング (2004)：ダンススポーツの芸術教育. 韓国スポーツリサーチ, 15(2)：231-240.
- 23) ギムヤングリエ, ホヒョンミ (1999)：女性のスポーツ活動に対する収用及び性固定観念の関係. 韓国スポーツ社会学会誌, 12：265-278.
- 24) 韓国経済：2001. 8. 10.
- 25) YTNニュース：2004. 8. 25.
- 26) YTNニュース：2006. 4. 2.
- 27) www.idsf.net
- 28) www.kdsf.co.kr
- 29) www.kcue.or.kr